



星川だより

熊谷空襲を忘れない市民の会 会報



「戦後80年(被爆80年)その先へ」に参加して

J R 東労働組合
小山 崇

濱中紀子(はまなかとしこ)さんと、加藤一夫さんの講演会には、米田さんからの誘いで参加しました。

私が核兵器について初めて触れたのは、小学生のころだったと思います。図書館で読んだ「はだしのゲン」がきっかけのひとつです。漫画も好きだったので単行本を集めて、全10巻を揃えました。他にも「ひろしまのピカ」や「風が吹くとき」という作品を読んだのを覚えています。核兵器のとてつもない破壊力と、じわじわと命を蝕む放射能は恐ろしいものだと感じました。そして、社会人になって労働組合が主催する平和研修で数回ほど広島や長崎に訪れ、現地踏査や被爆された方々のお話を聞きました。実際には経験された方のお話は生々しいものでした。そうやって人に話すことは非常に



つらいことだと思えますが、使命のようなものを持って伝えていけるのだと感じました。

講演された濱中さんは、今から50年ほど前に肥田舜太郎氏と出会ったことがきっかけで「生き残った者の務め」と被団協での活動を始めたそうです。平和を守るためにつらい過去を語っている方々の思いは同じなのだと感じました。被爆された方々は、周囲からの差別や偏見を恐れ、自分が被爆者であることを言えなかった人が多いようです。被爆したのは戦争が原因であり、元をたれば戦争を始めた国の責任である方々のはずです。国民は戦争の犠牲者なのに、なぜ差別や偏見が起こるのか。戦争とは違いますが、ハンセン病などの難病や、数年前の新型コロナウイルス流行の時に、感染した人が引越いや自殺にまで追い込まれたことを考えると、いまだに日本は精神的に自立していないのではないかと感じます。

被団協がノーベル平和賞を受賞したというこ

とは、核兵器廃絶の運動が世界的に認められたということだと思います。核廃絶の運動は何ら間違っておらず、被爆国である日本は核廃絶に向けて全力を傾注すべきです。それにも関わらず、日本政府は核兵器禁止条約を批准せず、締結国会議へのオブザーバー参加も見送るなど、核廃絶を願う人々との間には大きな隔たりがあることを感じました。また、元軍人には恩給など国からの補償がありますが、一般市民には国からの補償がないことも矛盾しています。戦争で犠牲になったのは軍人も一般市民も同じはずであり、むしろ戦争を推進した側の保証が手厚いことはおかしいと思います。

加藤さんの講演では、第五福竜丸について触れられていました。米国の核実験によって乗組員が被曝し、久保山愛吉さんが犠牲になりました。核実験は戦争のために行うものだから、戦争で殺されたのと同じだと思います。この実験では千隻以上の船舶が被曝したそうですが、実験場周辺の島々に住む人々も被曝した後遺症に苦しんでいるそうです。今まで何百回と行われてきた核実験では、地球環境や

人々の生活、健康が破壊されました。世界には、1万発以上の核兵器が存在しており、いつでも使用できる状態にある中で生活をしていることを考えると、非常に恐ろしいことだと思います。

3月24日に「統合作戦司令部」が発足されました。他国領域のミサイル基地破壊などの敵基地攻撃能力の司令塔にもなるものです。平和憲法の理念は消えたのでしょうか、米国と一体となつて戦争を担う国になったことに危機感があります。いまはSNSなどで様々な情報が発信されていますが、報道や噂に惑わされないように学習して、悲惨な歴史を繰り返さないようにしていきたいです。戦争で苦しんだ方々のためにも私たちの世代が受け継ぎ、さらにその後の世代へ引き継ぐことが重要だと思います。



キネマの天地『レッド・サン』 赤い太陽とは

小川美穂子



数ヶ月ぶりの映画鑑賞。それは深谷シネマでの「レッド・サン」とあいなった。数日来、脳内には他の二作も去来していた。しかし、この作で本稿を書くのもキネマの神さまのお計らいか。

運命的な出会い、それを運ぶものは、例えば、何気ない友との会話、小耳に挟んだ一瞬のラジオアナウンス、移動中に見かけたポスター、私の場合はそんなところ。今作の場合、少し前にマンスリーを貰いに出かけ館内でチラシを入手したことが大きかった。だって、アラン・ドロンの、三船敏郎、チャールズ・ブロンソンの並ぶインパクト。以来、題名のみ記憶する名画のワンシーンが、ハートにズキンと突き

刺さったまま… 3月27日朝、他のプランは投げ捨てて車に乗った。

映画を予備知識無しに観るのは、鑑賞後の後悔の要因になることもある。が、今回は、開館以来の重鎮・横山理事の閲覧用パンフレットを広げて、知人のMさんと映画談義ができた。MさんはTV鑑賞した際の字幕台詞回しを披露してくれた上、ニューヨークでの見聞にも触れた。曰く、「赤」は先住民を意味するスラングでもあるが、それはうがち過ぎだろうということ、当時のハリウッドの限界ラインデアン差別、について話は飛び。当然帰結は現代の世界情勢へ。そもそも昨夏か、彼と知り合ったのは。金曜夕刻の熊谷駅北口スタンディング「フリー・パレスチナ」なのだ。後で調べたら「赤」とは！ 日本人は太陽を赤で表現するが、米国の子どもは黄色で塗るのだとか。事ほど左様に常識・因習はお国柄にもより、無意識に擦り込まれているのだ。

今作、冒頭最初に耳に飛び込んだ台詞が「ライド・オン・タイム」。山下達郎の名曲タイトルがシンクロ、一気に「映画の夢」に没入した。西部劇に

は縁薄く怖がりなので、次々に疑問続出、目を閉じかけては見開き、展開の早い早回しの二時間強を堪能した。大地を行く列車の疾走感、幕末という世界史上の一大エポックへの臨場感、名場面続出のガンさばき、肉感的な美女達とのきわどい応酬、ワイルドなソウルフード・珈琲・酒・煙草、そんな中でキラリと光る日本刀、殺陣、羽織袴に組紐・褌、おにぎり…

以下は映画製作裏話だ。三船自身がハリウッドに売込みに飛び、関係者の様々な疑惑の果てに、御大・三船自身が『CON』シリーズのテレンス・ヤング監督を指名。最後に欧米からということでドロンの参加が滑り込みセーフ、音楽も「アラビアのロレンス」他のモーリス・ジャールに決まった。

三船はスタント無しで演じた。私も日本人として誇らしい。その上で、私のイチオシはブロンソンとなった。ニヒルで野性的、奸智に長け、死闘を制す。長い脚で三船と砂漠を歩む。ほんのこのところ観賞前はドロンに会いに行つたつもりで、旧知の女性ボランティヤにもそう挨拶したら、「カッコイイですよ。それに昔の

自分に会えますよ。こんなアウトホームな深谷シネマが好きた。

最後に、この口顔を出していた竹石前館長と情報交換した。「戦後八十年の夏の予定は、八月末に今村プロゆかりの板橋で今村昌平監督「黒い雨」、深谷では九月、市と協同事業の恒例親子向け鑑賞会「夕風の街 桜の国」故佐々部清監督深谷ロケ」。二作共に舞台は広島だ。

淀川長治 — 映画館が僕の学校だった — 淀川・佐々部・竹石と「鬼のイマヘイ」が映画斜陽後創設した横浜放送映画専門学院・現日本映画大学の系譜に連なる。同じく、演劇科一期、植木職にして熊谷初の市民劇団シナトラ創設・故岡田貴史。オカダ桜がセツ

戦後80年 平和展
最後の空襲・熊谷

8.13(水)-8.18(月)

入場無料

お知らせ
八木橋カトリアホールで戦後80年 平和展を開催します。最後の空襲熊谷とは、戦時中の貴重な資料、体験者のインタビュー映像、若い世代への継承などを企画しています。

梅構内で僅かにピンクに仄めく。春よ春。映画の街深谷、キネマの天地で、世界平和を願う。

「レッドとは日本。侍の登場する西部劇をと、全盛期のミフネがハリウッドに乗り込んで製作」



会計報告

(2025/2/26~2025/4/17)

収入: 33,500 円
支出: 15,940 円
残高: 103,947 円

編集委員 吉田庄一、小川美穂子、米田主美
連絡先 吉田庄一 (090-4957-9181)
メール imajn241@gmail.com
HP <http://www.peace-kumagaya.org>